

# On the Buddhist prints of The Buddhist Funpon Collection Soryu Tamura Had

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-11-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松尾, 芳樹, Matsuo, Yoshiki メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15014/00000492">https://doi.org/10.15014/00000492</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 田村宗立旧蔵仏画粉本における仏教版画について

松尾 芳樹

京都市立芸術大学芸術資料館が所蔵する田村宗立旧蔵仏画粉本は、六角堂能満院仏画工房の旧蔵粉本を中心とする、2700点におよぶ幕末期の仏教図像群として貴重である。その中に絵像を中心とする276点の仏教版画が含まれる。六角堂能満院の仏画工房を主宰した会津の僧憲海は、青年期に長谷寺版両部曼荼羅の開版に関わった。彼はその後、図像の収集を行う一方で、印施千種を発願し、経疏陀羅尼の出版の他、絵像の開版を行い、図像の流布に努めている。田村宗立旧蔵仏画粉本における版画には、この能満院工房に関わる出版物が含まれ、飲光の思想に影響を受けた憲海の事跡を物語る場合、重要な意味を持っている。また、能満院には憲海の他、大成、宗立ら若い僧が研鑽を積み、彼らは後に尊峰によって行われた御室版両部曼荼羅の開版に助力した。この仏教版画群には、尊峰に関わる資料も含まれている。

主要項目：六角堂能満院 大願憲海 大成憲理 田村宗立 法雲尊峰 慈雲飲光 粉本 図像  
仏教版画 御室版両部曼荼羅 長谷寺版両部曼荼羅

---

## On the Buddhist prints of The Buddhist Funpon Collection Sōryu Tamura Had Yoshiki Matsuo

The Buddhist Funpon Collection Sōryu Tamura Had of the museum of Kyoto City University of Arts is precious as Buddhist iconographic pictures of the last days of the Tokugawa Shogunate term. The most part of them are the Funpon collection which the buddhist painting studio of Rokkakudō Nōmanin temple had, and the total is about 2700. 276 Buddhist prints that most is Buddhist painting are contained in the collection. Priest Daigan Kenkai from Aizu supervised the buddhist painting studio of Rokkakudō Nōmanin. He was concerned with the publication of the Hasedera edition of Dual World Mandara in the adolescence. After that, while iconographic pictures were collected, he prayed to do 1000 kinds of publication. Then, he published the sacred book and a Iconographic picture at the buddhist painting studio of Rokkakudō Nōmanin, and worked for the spread of the proper Iconographic picture. The print group to introduce here contains the publication concerned with the studio. These are important objects because the achievement of Daigan Kenkai who took the influence of the idea of Jiun Onkō is shown. And, young priests such as Daijō Kenri, Sōryu Tamura were working except for Daigan Kenkai in the studio. After that, They cooperated with the publication of the Omuro edition of the Dual World Mandara realized by Hōun Sonpō. The precious objects concerned with Hōun Sonpō are contained in these prints, too.

Key Term: Rokkakudō Nōumanin, Daigan Kenkai, Daijō Kenri, Tamura Sōryu, Hōun sonpō, Jiun Onkō, Funpon (Copies and Sketches for production of the the east Asian Style paintings), buddhist iconographic picture, buddhist prints, the Omuro edition of the Dual World Mandara, the Hasedera temple edition of the Dual World Mandara

## 〈1〉はじめに

京都市立芸術大学芸術資料館が所蔵する田村宗立旧蔵粉本は、幕末期の仏画粉本群である。京都六角堂能満院に住した僧大願憲海（1798-1864）が、生涯をかけて収集し、活用した粉本を中心としたこの資料群は、高僧図や垂迹図をも含む多くの仏教図像を記録することで貴重である。最後の所蔵者が、工房の画僧であり、後に関西洋画界の草分けとなった田村宗立（1846-1918）<sup>(1)</sup>であったことから、その名を称している。資料群の概要はすでに、法蔵館発行の『仏教図像聚成－六角堂能満院仏画粉本』<sup>(2)</sup>により紹介されているので、あらましを述べておこう。

能満院は、六角堂の名で親しまれている天台宗頂法寺<sup>(3)</sup>の境内にあった僧院である。虚空蔵菩薩を本尊とする真言宗智積院末のこの寺に、仏画工房が開かれたのは、嘉永4年（1851）頃と思われる。その最後の住持憲海は、寛政10年（1798）会津に生まれた。晩年使用した大願のほか、林岳、無言蔵なども号している。豊山長谷寺で研鑽を積むが、天保3年（1832）河内長英寺の黙住信正（1765-1833）に進具し、律僧として、宗派を離れた道を歩むようになった。一旦、会津八角神社の別当亀福院<sup>(4)</sup>に住するが、やがて弟子の大成（1828-1891）を連れて畿内に戻り、図像の収集とその流布に専心するようになる。能満院に住した経緯はまだよく分かっていないものの、工房は最盛期8人の僧を数える盛況を呈した。

しかし、元治元年（1864）7月、蛤御門の変による兵火により能満院は焼失し、焼け出された僧たちは、神泉苑南の蓮光院<sup>(5)</sup>に寄寓した。憲海は被災後まもない9月に、この地で寂している。工房に蓄えられた図像粉本、版木類の多くは焼失したが、絵本筆筒二棹分はかろうじて持ち出され、これらは、田村宗立の手元を経て、現在の京都市立芸術大学の前身京都市立絵画専門学校に寄贈された。その総数は約2700点あり、まくりのまま保存されている。この内、1割に相当する276点が木版墨刷りの紙片であり、白描粉本が中心であった『仏教図像聚成』では、これらが割愛されている。本稿では、能満院粉本中の版画を紹介し、六角堂能満院粉本の全容を補うものである。

## 〈2〉印施千種の大願

憲海が印施千種の願を立てたことは、小原洪秀氏が収録した彼の略伝<sup>(6)</sup>に記されている。伝聞ではあるが、千種類の出版を行うことを祈願し、実際に七八百種の開版に及んだとあるので、単なる祈願にとどまるものではなかったようである。粉本の中にも、「勝敵毘沙門天像」<sup>(7)</sup>に「王城中心六角堂能満院大願施印一千種内」と墨書があって、憲海が千種開版を企てたという記事は信じてよい。

こうした願望が憲海の中にいつごろ生まれたのか定かではない。会津亀福院に住持した時期の刊本として「方服歌讚儀」（天保4年（1833））「金剛壽命陀羅尼經」（天保7年（1836））が、会津の金剛寺に伝えられた文書<sup>(8)</sup>の中に含まれており、また、幕末期亀福院を兼住した自在院<sup>(9)</sup>にも「両部讚草昏／初夜金剛界／後夜胎藏界」（天保13年（1842））が伝えられている。能満院時代に先んじて、憲海が開版を行っていた事実をみれば、憲海が大願をかけるに至るその源流はかなり早いものであったと考えられる。

先の略伝にも記されているように、憲海は木版刀刻の技術に優れていたとされる。長谷寺に



所蔵される「法界安立塔」版本<sup>(10)</sup>に、「文政五年壬午南呂詣玉テ河州葛城山高貴律寺ニ而奉拝写シ尊木也爲報恩謝德ノ謹シテ而摸刻シ之ヲ因ミニ本縁起之文略シテ令ム記セ于茲ニ東陸会陽沙門無言蔵」とあれば、文政5年(1822)25歳の頃にはすでに独自の開版に手を染める能力があったことになる。この高貴寺の法界安立塔というのは、弘法大師の自筆として伝えられた五輪塔婆で、宗立旧蔵粉本の中には、同年採られた拓本が含まれており、憲海が強い関心を持っていたことが明かな資料である<sup>(11)</sup>。興味の対象を開版という行為に結びつける、憲海の行動様式をすでに顕していることが注目される。

この版本の裏には「三社之託宣」が彫られている。その中に「文政十年丁亥孟春 僧無言蔵印施」との刊記が見られるので、憲海の出版活動は、その後も継続的に行われていたと考えられる。例えば同じく長谷寺に所蔵される版本のうち「光明曼荼羅」<sup>(12)</sup>「大黒天像」<sup>(13)</sup>には、版本の隅にそれぞれ「文政九年丙戌四月十一日無言蔵摸刻」「文政九年丙戌三月無言蔵摸刻」と銘があり、長谷寺山内で行われた出版に、憲海が関わることもあった状況をうかがうことができる。

### 〈3〉長谷寺版の開版

文政12年(1829)、長谷寺版両界曼荼羅の開版事業が行われた。この長谷寺版というのは、河内髪切山慈光寺鑊慶(1748-1829)<sup>(14)</sup>の発願により、豊山勸学院所蔵の両界曼荼羅<sup>(15)</sup>に基づいて、京都東寺所蔵の現図曼荼羅と校訂のうえ開版した印行両部曼荼羅である。この曼荼羅図開版の契機となったのは、刊記にあたる「刻両部大曼荼羅附言」に記されているとおり、鑊慶によって長谷寺で行われた曼荼羅の講義であった<sup>(16)</sup>。そして、表紙の装飾に使用された東大寺戒壇院扉絵の図像は、その版の裏面に記された墨書<sup>(17)</sup>から、憲海所蔵の粉本によるものであったことがわかっている。この大事業に憲海も関わったことを示す証しである。

この開版作業で重要なのは、下絵の制作と版の校訂である。空海の将来したいわゆる現図の再現を目標として校訂を繰り返し、少しでも正確なものに近づけること、その指示を的確に職人に指示して版にすること、この二つが求められる作業である。長谷寺には、現在もこの両界曼荼羅の校訂作業を物語る資料が残されており<sup>(18)</sup>、こうした制作の過程を垣間見ることができる。

事業には、勸学院の僧をはじめ多くの僧が関わったから、憲海はそのひとりにすぎない。しかし、その役割は決しておろそかではなかったと考える。というのも、文政3年(1820)に憲海は、鑊慶から伝法許可灌頂を受けており、すでに師弟という関係であった。校訂作業はきわめて集中力を要求するものであり、82歳という鑊慶の高齢を考えれば、一度始まった曼荼羅開版の事業にあたっては、彼を補佐をする人物の存在は、自ずから必要とされたと思われる。

田村宗立旧蔵仏画粉本中の「鑊慶像」<sup>(19)</sup>から、文政10年(1827)に、憲海が鑊慶の寿像を描いていることが分かるので、鑊慶は画技においても憲海に信頼を寄せていたと考えられる。また一方で、憲海は、文政11年(1828)から翌年にかけて、高山寺で慧友僧護(1775-1853)の両部曼荼羅書写を助けており<sup>(20)</sup>、彼自身が曼荼羅製作に関わる能力を持っていたのは確実である。鑊慶が憲海の能力に期待するところがあって不思議はない。この難事における、憲海の存在は注目されるべきだろう。憲海の事績において、両界曼荼羅の研究と経疏図像開版への興味は、行動の大きな動機であったと思われる。その両者を具える長谷寺版開版事業への関与は、



憲海の千種施印を理解する上で重要である。

#### 〈4〉憲海と印行曼荼羅

憲海は若くして長谷寺に登っており、彼の学問は長谷寺の教学を基盤に発展していたと考えられるが、高貴寺や慈光寺など正法律を護持する僧院への修学も盛んで、慈雲飲光（1718-1804）<sup>(21)</sup>の思想に強い影響を受けたことが分かっている。憲海が空海に対して持つ強い思慕の念もまた、現図曼荼羅を重視する飲光との接点を考えれば、さらに理解しやすい。法界安立塔の印行でもわかるとおり、憲海は、こうした信仰の契機を開版に結びつけることに躊躇はなく、空海思想の具現である現図曼荼羅に対する開版の祈願を持つことは、自然な心の動きが推測される。彼が印施千種を発願するに際し、長谷寺版開版に関わった経験は大きな意味を持つ。

もちろん、長谷寺版に見るような両部曼荼羅の印行は、この時期、突然に発生したものではなく、先行する曼荼羅印行の歴史を受けたものである。近世の安定した社会は、教学の復興をもたらし、両界曼荼羅に対する研究を促した。澄禅による種子両部曼荼羅の開版もその一例であり、能満院粉本に含まれる龍肝（1747-?）版「種子曼荼羅」（版画目録59・60）も澄禅版により校訂しているのを見れば、憲海の両部曼荼羅研究の視野には印行曼荼羅が当然含まれていた。また、憲海と同じく正法律を堅持した海如（1803-1873）<sup>(22)</sup>は、弘法大師千年忌に「種子両界曼荼羅」（版画目録51・52）を供養施印している<sup>(23)</sup>。両部曼荼羅を重視した飲光の思想を受け継ぐ憲海にとって、両界曼荼羅印行は自分自身の問題として真摯に受け止められていたと考えられる。

ただ、これらの種子曼荼羅に比べると、尊像によって描かれる大曼荼羅にはより深い知識が要求される。開版には十分な研究と善本の図像が必要だった。曼荼羅の講義を行った饒慶がそうした志を持っていたことが、開版の直接の契機になったとはいえ、実際には、「刻両部大曼荼羅附言」にあるとおり、先行する亀龍院曼荼羅の存在が、開版の機運を作り出していたのである。

亀龍院曼荼羅というのは、高野山引接院の常塔により京都の亀龍院において安永2年（1773）に開版された印行両部曼荼羅である<sup>(24)</sup>。明和8年（1771）に入手した粉本をもとに、東寺の現図曼荼羅元禄本と校合し、絵師清水宣雅により四分の一に縮図させて印行したというもので、縦三尺五寸、横三尺五分という大きさは、当時としては類を見ない大事業であった。不幸にして、天明8年（1788）の大火で版は焼失してしまったが、長谷寺開版がこの亀龍院版の復刻の企画から、発展的に実現したことを考えれば、先達の偉業としてその成果を活用したとして不思議はない。注目されるのは、長谷寺版の版木の調製、画工、彫師とも皆京都の職人を選んでいることである。

長谷寺が所蔵する長谷寺版の版木には制作者に関わる墨書を有する木箱が付属しており<sup>(25)</sup>、その墨書から画工は長谷川賀市郎等叔、彫刻は田原重兵衛、木地師は上田吉兵衛とされる。長谷川等叔は烏丸仏光寺下ル、田原重兵衛は二条堺町西入ル、上田吉兵衛は御幸町御池下ル東刺と三者は下京の比較的近接する場所に住む職人で、製版作業は京都で行われたと考えるのが自然である。亀龍院は錦小路新町にあり、彼らの住地からほど近くに位置している。この周辺も、天明の大火に被災した地域ではあったが、人材が全く失われてしまうはずもなく、この地に亀龍院本によって培われた、大判印行曼荼羅製作の記憶が期待されたのではなかったかと考える。

当時、豊山絵所を名乗っていたのは新町通松原上ルにある森田家<sup>(26)</sup>だが、この長谷寺版両界曼荼羅制作では、下絵を同じ京都の長谷川家に変更している。長谷川家は当時、京都の仏画工として活躍しており、憲海は文政9年(1826)に河州楠葉村久修恩院を訪れた際、長谷川等鶴の描く曼荼羅図粉本<sup>(27)</sup>を写しているのだから、彼らの曼荼羅書写の技術を知っていたはずである。この時期、憲海は仁和寺や高山寺といった古刹を訪れて、京都と長谷寺をしばしば往来しており、こうした情報の収集にも、一役買うことができたと思われ、画工の選定にその意見が反映した可能性がある。

#### 〈5〉能満院の開版事業

歴史的にみた摺仏は、日課供養に始まり、勸進・護符・粉本という用途へと展開して、近世に至っている。能満院粉本に含まれる版画もこうした流れの中にあっただろう。もとより、頂法寺六角堂は観音霊場として西国札所のひとつに数えられ、町堂としても機能したため参詣者のみならず、多くの人々が参集した。その境内の一画にあった能満院にとって、施印に対する喜捨は貴重な財源であったに違いない。それは能満院が持つ宗教的な使命であるとともに、寺院経営の基盤として重要な意味があった。

頂法寺にゆかりの尊像としては、本尊である如意輪観音像、創建縁起に関わる聖徳太子像、百日参籠の伝記に見る親鸞上人像があげられる。聖徳太子像については、大成による版下<sup>(28)</sup>があり、その需要に応える活動のあったことがわかる。とはいえ、現在能満院粉本の中に遺される版画については、何れが収集された版画で、何れが制作したものか、また憲海あるいは能満院がこれらとどのように関わったのか、明確にできるものはわずかである。というのも、版木をはじめとする開版に関する資料のほぼ全てが、元治元年の被災によって焼失した状況が考えられ、能満院の中心的な活動であったと思われる施印事業に関しては、推測せざるを得ない部分が多いのが現状である。

粉本の中に、現存する墨摺を一覧にしたのが別表の「田村宗立旧蔵仏画粉本版画目録」である。寺院で開版される版本といえば、經典類をはじめとして、絵像・縁起・境内図・祈祷札・勸化・開帳・巡礼詠歌・籤などがあげられるのだが、能満院の所蔵版画においては、典籍類が意識的に除かれているので、当然のごとく絵像が大部分を占める。その図様としては、如来・菩薩・明王・天部・諸神・高僧と各種のものが揃っているのだから、彼らの関心が幅広い尊像に対し存在したことがうかがえる。能満院で施印された絵像版画においても、同様に広範な尊像を扱っていたと考えてよいだろう。

先にも述べたとおり、能満院の版木は、ほとんど失われてしまい、墨摺にしても、粉本の中に憲海が直接関わったことがわかる版画は少ない。表に見える、「種字星曼荼羅図」(版画目録1)「釈迦親手華判梵書唵字」(版画目録2)「六字名号」(版画目録3)などは、憲海による施印の実際を伝える数少ない遺例である。また、「光明真言字輪曼荼羅図」(版画目録4)は、安政5年(1858)に憲海が開版した墨摺を明治10年(1877)に志摩菅島村の木下佐助が復刻したもので、憲海自身の手になるものではないが、憲海施印の実際を伝える資料である。ちなみに「釈迦親手華判梵書唵字」は、手本となった墨摺(版画目録73)が粉本中に遺され、憲海が復





図1 釈迦親手華判梵書呪字



図2 宝相七神図

刻を行っていたことが確認できる貴重な例となっている。憲海の施印にあっては、復刻版の制作も事業の一部であったと考えてよい。

それから、先にも触れた「勝敵毘沙門天像」は版画(版画目録6) そのものには「能満院印施千品之」とあって、憲海の名は見えないが、その下絵には「大願施印一千種内」として、憲海の号大願の文字が見えるので、やはり憲海施印とみてよいだろう。ただ、憲海が大願という号を専ら使用するようになるのは、能満院の工房が成立して以後、嘉永6年(1853)ころからであり、大願という号そのものが能満院の活動と結びついていたと考えられるので、憲海の施印千種という祈願は、憲海のみならず能満院の祈願として、工房の事業という位置づけであったと考えてよいかもしれない。

「宝相七神図」(版画目録14・15・16)は、そうした能満院施印の実態を示して興味深い。この宝相七神という護符はあまり例を見ないもので、韻を見れば、能満院の本尊でもある虚空蔵菩薩が粟島明神として垂迹し、その眷属である宝相神が子を疱瘡から守るという信仰を背景とするらしい。粟島神が医薬祖神また温泉権現として信仰される少彦名尊と同体とされるのがその理由である。宗立らによる版下が複数残されていて<sup>(29)</sup>、人気の護符であったらしく、こうした施印が、能満院の経営を支える重要な開版であったことを教えてくれる。

能満院の所蔵する粉本に、多くの民俗神が含まれていることから、憲海が民間信仰に興味を示していたことが知られているが、厳密な両部曼荼羅の図像を求める一方で、こうした儀軌の定かでない民間の図像を取り上げるところに、憲海の民衆教化の態度を見ることはたやすい。大成が描いた「船玉明神像」は、本来本画制作のために描かれた図像<sup>(30)</sup>で、新図である。こうした新図であっても版(版画目録17・18)を起こすのは、そこに記される縁起に、民衆救済の利益が求められるためであろう。「宝相七神図」同様、こうした新図に対し憲海は寛容であり、憲海が求める正しい図像の流布という目的が、決して独善的な原理主義によるものではなく、その目的としての民衆救済にあったことをうかがわせる。



憲海が神像に対して持つ親しみが、開版活動にも早くから影響していたことは、長谷寺の版木に大黒天や三社託宣が含まれていることから理解できる。粉本に含まれる明治2年(1869)に復刻された「稲荷明神像」(版画目録10・11)は、使用する林岳や無言の号からおそらく長谷寺修学時代に開版された版画によったものと思われ、神像の施印活動は、能満院時代に先んじて始められていたようである。従って、憲海の意志を実現するための工房である能満院にとって、神像は単に収集されるだけの資料ではなく、その施印の一部を形成する、重要な要素であったと考えてよい。

嘉永6年(1853)「梵学宗要章」が能満院で開版された。火事によって、版木を失った現在、能満院の経疏典籍陀羅尼類の開版状況は不明である。小原氏の略伝には、大随求陀羅尼や大仏頂陀羅尼のほか『仏遺教経』の刊行を伝えるが、確認するすべはない。もとより、多数施印されることの多い陀羅尼や祈祷札の類は残りにくいものであり、典籍の出版においても、大部なものは行われなかったと思われる。智積院に納められた資料の中にその一部なり存在する可能性はあるが、現在のところ明確にそう判断できるものは少ない<sup>(31)</sup>。結局、能満院施印の実態としては、小典籍から、陀羅尼を初めとする護符・祈祷札、古画に見る尊像・絵図の写しと、その応用たる新図まで、かなりの振幅があったと想像するほかない。多様な版本を扱う、個性的な出版活動をしていたことになる。能満院の活動期間はおよそ13年にわたると思われ、決して短いとはいえないが、多様な機能をもった寺院の境内に位置したためか、その特殊性が認識されにくく、紀行随筆に触れられたものを見ないのは、残念である。

ただ、「宝相七神図」の例に見られるような護符が頒布されたとすれば、祈祷の需要もあったと考えて不思議はない。実際、小田慈舟氏が伝える、憲海が請雨経法を得意としたという伝承<sup>(32)</sup>に関わる粉本も幾つか遺されていて、版画としては「請雨水鉢図」(版画目録8・9)が目される。墨刷りと彩色本があり、実際の祈祷に際しては消耗品となる水鉢図の実際を伝える資料である。これは施印とは異なるが、別の側面から能満院の活動を垣間見させるものである。

#### 〈6〉法雲による開版

また、版画の中には、大願入寂後の明治期に、大成や宗立によって、制作されたものが含まれている。これらは憲海あるいは能満院の開版とはいいがたいが、憲海の収集した粉本を元に版を製作しており、憲海施印の祈願を継承する活動といえる。その多くは、明治3年(1870)に開版された御室版両部曼荼羅の開版と同じく、志摩庫藏寺の法雲尊峰(1834-1889)<sup>(33)</sup>が関与した版画と思われる。

御室版両部曼荼羅というのは、法雲の発願によって仁和寺尊寿院において開版された、高雄曼荼羅粉本による両部曼荼羅の図像集である<sup>(34)</sup>。この開版は、現図と呼ばれる空海将来の図像を原寸で版刻し、後世に伝えようとした偉業として、よく知られている。法雲は長谷寺能満院の海如に従って曼荼羅を学び、正しい図像を求めらるうち、明治維新の混乱期に兼意模本による図像を目にしてその上梓を祈願したという。幸い資金の援助もあり、また憲海のもとで曼荼羅の図像に通じた大成らの助力をも得ることができ、ようやくこの難事をなしとげたのである。

もとより法雲の曼荼羅に関する知識は長谷寺に学んだのだから、鏝慶が講じたものと同じで

おり、憲海の学問とも通じていた。また、法雲が参考にした兼意本模本は、その奥書に高山寺慧友僧護による天保12年（1841）の修理銘があり、憲海が師事した慧友のもとにあったことが分かるので、憲海も目にした可能性のある粉本であった<sup>(35)</sup>。法雲の祈願はまさに憲海の歩んだ道を進めるものであったといえる。従って、大成ら憲海の弟子たちがその事業に関わるようになるのは奇遇ではあったが、むしろ当然の帰結だった。

御室版開版においては、大成、宗立、雲道（1840-c.1882）の三人が、粉本から下絵を起こす役割を担った。大成は金剛界曼荼羅四印会と胎藏界曼荼羅の不動明王を描いたのみなので、量的には少ないが、法雲よりも年長であり、監督的な立場をとって、雑事もその身に引き受けていたのであろう。若い宗立と雲道が大部分の下絵を描いた。宗立は胎藏界曼荼羅の大部分を、雲道は金剛界曼荼羅の大部分と胎藏界曼荼羅の一部を分担している。

このように幕末維新时期には、両部曼荼羅の権威となっていた法雲であったが、『法雲阿闍梨行実』<sup>(36)</sup>に、「また、能く八祖大師十二天を梓行す。（智全曰。八祖十二天之版木は、法雲阿闍梨在世の時、名古屋大須宝生院に送托す。將に謀る所有らんとす。しかるに阿闍梨明治二十二年示寂す。また同寺同二十五年祝融の災に罹る。共に終に烏有となる。嗚呼惜しいかな。）孔雀不動二明王等画像、及び孔雀請雨（以上版木は伊勢国に在り。）仏頂随求等諸経（以上及び大願律師自筆四度次第版は、尾張国宝生院萬徳寺地藏寺に納む。）其の費また資ならず。しかるに其の臨終の言。なお高野山五大明王及び因幡堂愛染明王等画像を刻する能はざるを以て遺憾となす。」とあり、御室版以外の開版についての記事がある。粉本の中には、この記事との関わりを見ることができる版画（版画目録20～30）があり、これらの開版の資金としては、主に志摩方面の寺や信者からの喜捨が募られている。版画には明治2年（1869）から同10年（1877）の刊記があり、御室版以後に行われた事業であることがわかるので、大成らの能満院以後の活動を教えてくれる貴重な資料ともなっている。

この時期、病を得ていた法雲は症状が重く、明治3年の御室版開版以後、明治22年（1889）に曼荼羅の講義のため上洛するまで志摩に退いているので、これら大型版画の開版を実際に推進したのは大成あるいは宗立らであったと考えてよい。法雲を軸とする人脈によって資金が集められ、大成らが下絵を作成して彫刻の手配をするという方法であったと考えられる。従って、製版は京都で行われた可能性が高い。

また、版画の中には、御室版の尊像を復刻して頒布したもの（版画目録31～42）が含まれている。施主となっているのは、ほとんど志摩国の信者であり、これも法雲ゆかりの版画と考えてよい。こうした御室版の復刻版には勧進の役割もあったと思われ、また正しい図像の流布という憲海以来の能満院の祈願も担っていたことだろう。御室版の開版は、廃仏毀釈の荒波を受けた明治初期の仏教界に、絵像版画の花を開かせたのである。

「八祖像」（版画目録21～24）は大願が嘉永4年（1851）に大和国三輪山平等寺中多楽院において模写した粉本により大成が下図を起こして明治2年（1927）に法雲が開版したものであり<sup>(37)</sup>、「十二天像」（版画目録25～28）は安政7年（1860）に大師将来本と備中霊山寺の十二天像を校合して大願が模写した粉本をもとに宗立が下図を起こして明治10年（1935）に法雲が開版したものである<sup>(38)</sup>。伊勢や志摩の信者たちからの喜捨によって資金は集められた。





図3 孔雀明王像

また「不動明王像」(版画目録30)は嘉永元年(1848)に高山寺で憲海が写した粉本により志摩青峯山正福寺の大円が彫刻したものである。法雲が協力したとあるのは、資金の大半が志摩の信者から集められているので勧進であろう。「孔雀明王像」(版画目録29)は、文政12年(829)に長谷川等叔の粉本を大願が模写したものを、嘉永元年に智積院の原本と校合した時使用した粉本に基づいて開版したものである。粉本中の留書を詳細に刻し、密度のある図像をそのまま大判の版木に写し取っていて、一連の大型版画の中でも特筆に値する密度を見せる。おそらく刊記は別刷りにされたと思われる、開版の詳細が明確にされていないのが残念だが、出版にあたり憲海に対する配慮が遺されている点が興味深い。この後二者点も「法雲阿闍梨行実」にある「孔雀不動二明王」の記事によく合致するので法雲版と考えてよいだろう。

「法雲阿闍梨行実」の宮崎智全の注には、この八祖像と十二天像の版木は、明治25年(1892)に宝生院の火災により焼失したとあるが、東寺には、覆刻と思われる八祖像及び十二天の大型版木が遺されている<sup>(39)</sup>。「龍猛像」に見る刊記を比較すれば、東寺本は、泉涌寺龍暁(1838-1914)が願主となり、京都の寺院と志摩の信者が助力して開版したものである。龍暁を大僧正としているので明治28年(1895)に大僧正に補されてのちのものと考えられ、彼はその後東寺の住持を兼務したこともあるため、版木はそのまま東寺に残ったものと推測する。法雲入寂の地である泉涌寺の龍暁が、その開版の業績を惜しみ、覆刻に至ったと考えるのが妥当であろう。この時、すでに大成も雲道もこの世になく、宗立も洋画の世界に転身していた。東寺本の大型版画は憲海の下図ではあるが、もはや能満院工房の関わるものではなかった。

#### 〈7〉収集された版画

収集された粉本の中には、能満院の干与が不明な版画も多い。版画も図像のうちだから、粉本同様収集の対象となって不思議はないが、寺や在家信者による諸国の施印本を見る限り、必ずしも図像的に興味深いものばかりとは思えず。粉本に収められた意味はいまひとつ明確ではない。資料としての役割があったことが推測できるものとしては、次のような作例があげられる。

- 一 海如開版と思われる版画(版画目録52-59)
- 二 龍肝開版と思われる版画(版画目録60-62)
- 三 長谷寺開版と思われる版画(版画目録63-67)
- 四 憲海の所蔵印(「無言蔵」「憲海書籍」「無言蔵図書記」)のある版画(版画目録68-79)
- 五 六角堂能満院の所蔵印(「王城中真六角堂能満院」)のある版画(版画目録80-89)



## 六 その他裏書きなどの墨書により収集の意志または経緯が読み取れる版画（版画目録90-105）

海如は憲海の弟子であり、龍肝は憲海の師である。これら憲海の周辺にいた学僧もまた開版に熱心であったことは、憲海にとってよい刺激になったことだろう。他にも、何の特記事項もないが、冷泉為恭や原在中、長谷川等鶴の下図とされる版画には、絵師系粉本としての絵画的資料価値があるため、収集対象となった可能性がある。

収集された版画の一部には刊記があり。施主の分布がわかる。京都における施印（版画目録130-149）が最も多く、他も大半が畿内のものである。志州・勢州で施印されているのは、御室版以後に法雲との関わりの中で入手されたものと思われる。晩年の大成が社寺施印に協力している例があるので、あるいは依頼を受けて、復刻をすることもあったかもしれない。

また、まったく刊記を欠くものの中にも「十二天像」（版画目録239・240）や「黄不動像」（版画目録235・236）「宝珠曼荼羅図」（版画目録224）など、掛幅への使用も可能な比較的大型の墨摺が含まれている。こうした例は長谷寺の版木の中にも見られ<sup>(40)</sup>、開版そのものが作善であったと思われるが、この大きさの版画は、そのまま彩色して表装すれば尊像として使用することが可能で、量産仏画制作との関わりを見ることができる。単に墨摺の制作を目的とするにとどまらず、下絵粉本としての利用を意識したものと考えべきだろう。

版画を使用した量産仏画は、中世以後少なからず流通し、需要の多い近世においてはその数も増したと思われるが、推測されるその利用状況を考慮すれば、伝世することの難しい版画ということがいえる。美術史的には、顧みられることのない分野だが、文化史的な資料性は高い。能満院がこうした開版を行っていたかどうかは不明だが、遺された墨摺は紙質などから判断するに、明治にはいつてからの摺りと思われる。

### 〈8〉おわりに

会津から再び上洛した憲海は、はじめ、長谷川家にほど近い天台宗山王寺<sup>(41)</sup>に寄寓し、長谷川家の粉本を多数模写した。あたかも、長谷寺版二部曼荼羅開版の故地に引き寄せられたかたちだが、後に住持することになる六角堂能満院もまた近隣に位置することを見れば、憲海はこの地を自身の祈願にとって得難い環境と考えたのかもしれない。それは、施印を行うために必要な資材と粉本があり、交通の利便がよく、人が集散して図像の流布に適していることはもちろん、将来の両部曼荼羅の開版のための大型版木開版の歴史に期待することができた場所である。憲海の仏教は、戒律を護持する自らの生活のみにあるのではなく、その生活を民衆教化に結びつけることのできる、市井の直中にこそあった。

晩年の憲海が称した大願という号は、能満院での活動の開始時期以後専ら使用される。その大願という語が施印に関わる用法を以て使用されたことを見れば、憲海の祈願は実は開版に偏向していた。開版は正しい図像を流通させる簡便な方法と見なされた。憲海の時代、絵仏師として知られた木村了琢家にしても、沈滞の気分こそ否めなかったが、品格は維持しており、絵師においては冷泉為恭のように独自の成果を生み出すものもあった。粉本に残された墨書類を見ても、憲海は様々な絵師に対して素直に学んでいる様子が伺え<sup>(42)</sup>、憲海に当時の仏画全般に対す

る偏見は感じられない。

また、憲海の手になる着彩本画を見れば、その画技は、真摯な態度の溢れたものではあるが、熟練した絵仏師の仕事を著しく凌駕するとは言いがたく、彼が当時の仏画界そのものに奮起を促す立場にあったとは考えられない。略伝に記されているとおり、憲海が否定した「世間に流通する図像」とは、当時各所で印施された絵像や、これに類する町絵師の量産品を対象としたのであって、伝記には、誇張も含まれているのであろう。彼が、粗製仏画の流通を嘆いたのは、その図像への不満だった。

憲海が、両部曼荼羅の印行を祈願した契機として、飲光の思想との出会いは重要である。空海の伝えた図像を求めることもまた、その意志に連なるものである。従って、印施千種という祈願が、飲光の千衣縫製の故事に倣うところがあったとして不思議はない。憲海の信仰が、民衆教化を重視した飲光の意志を継ぐものとするれば、彼にとって図像の流通はその収集とともに大事である。憲海の事蹟における開版事業の占める役割は大きいと言わねばならない。

(注)

- (1) 田村 宗立(たむらそうりゅう) 1846-1918。丹波国園部に生まれる。1855年京都で大雅堂清亮に南画を学び、能満院の大願に従って仏画を描くが、写真に接し、洋画を描くようになる。1880年京都府画学校の創立に出仕し、西宗の教員となり、1889年明治画学館を設立。1901年関西美術会の結成に参加するなど、関西洋画界の草分けとして活躍。晩年は月樵の号で日本画を描いた。能満院の旧蔵品は、最終的には田村宗立が保管していたが、彼の死後遺族により、絵画に関するものを画学校の後身にあたる京都市立絵画専門学校(現京都市立芸術大学)に、図書書類を京都市東山区智積院に寄贈した。
- (2) 『仏教図像聚成-六角堂能満院仏画粉本』京都市立芸術大学芸術資料館編。2004年3月、法蔵館発行。
- (3) 紫雲山頂法寺は、京都府京都市中京区にある天台宗の寺院。聖徳太子の創建といわれ、本尊は如意輪観音。西国三十三箇所第18番札所。中世から町堂としても機能した。本堂が六角形であることから、六角堂の名で知られ、本坊にあたる池坊が執行として代々経営に当たった。
- (4) 福島県会津若松市にある八角神社(やすみじんじゃ)は、大同2年(807)創建の古社で、中世に葦名氏が領主となって以来歴代藩主の庇護を受ける。その別当寺であった亀福院は高野山心南院の末寺であったが、幕末期には無住となり、自在院が兼住したが維新後廃寺となり現在は神社のみ遺る。会津若松市相生町にある福聚山自在院は応永30年に開基した真言宗の寺院、近世は醍醐無量寿院の末であり、会津真言宗四カ寺の一寺であった。明治期の神仏分離制作に従い、鎮守であった天満宮は八角神社に移され、八角神社にあった文殊菩薩像は自在院に写されている。
- (5) 弘仁山蓮光院は京都市中京区にある高野山真言宗の寺院。北向き不動の通称で呼ばれる。隣接する墓地に大願憲海の墓塔がある。
- (6) 小原洪秀「印行曼荼羅について」(『密宗学報』178号(昭和3年6月)、312頁。該当する部分を抜写しておく。「仏畫に巧にして、且木版刀刻の技にも通じ、幾多の佛典を彫刻殺青し、印施千種の宿願ありて、大随求大佛頂兩陀羅尼、仏遺教経等無慮七八百種を印行せり。』
- (7) 前掲注2書、資料番号2201。
- (8) 金剛寺は会津若松市七日町にある真言宗(現在室生寺派)の寺。中世以来歴史を持ち、近世は醍醐無量寿院の末であり、会津真言宗4カ寺の一寺であった。金剛寺文書は現在1028点が福島県歴史資料館に寄託されており、同館の「歴史資料館収蔵資料目録」第21集に目録が収録される。「方服歌讚儀」(資料番号640)は天保4年(1833)3月。「金剛壽命陀羅尼經」(資料番号162・163)は天保7年(1836)8月刊。
- (9) 注4参照。
- (10) 元興寺文化財研究所編『豊山長谷寺拾遺 第二輯 版木』(1999年5月、総本山長谷寺文化財等保存調査委員会)目録番号155。
- (11) 大阪府南河内郡河南町にある神下山高貴寺は、役行者を開基とし、はじめ「香花寺」と称したが、弘法大師

空海が留錫した後、伽藍が整い、高貴寺と呼ぶようになった。元弘元年（1331）の兵火により衰退したが、安永期に慈雲飲光が来住して、僧坊を整備し、天明6年（1786）高貴寺は正法律の総本山となった。明治以後は金剛峯寺末となっている。慈雲飲光（1718-1804）は大坂に生まれ、貞紀忍綱に剃度を受け、河内野中寺に学んだ真言僧だが、長栄寺や高貴寺を復興するなかで、正法律を唱えて一派をなした。民衆教化につとめる一方、『梵学津梁』千巻を著すなど悉曇研究にも大きな業績をなした。法界安立塔については田村宗立旧蔵仏画粉本の中に関連資料が複数存在し、「爰に高祖大師寶祚延長法界安立之御為にとて手つから一基之卒塔婆をきさミ山上に安置し給へり数百餘年墨汁新に潤ひて梵漢兩字炳然たりニに當寺の靈宝これにまされりとて今は經庫におさめて函底に秘しけり」と縁起を写したものに加えて、乾拓による弘法大師五輪塔婆拓影2枚とその封紙がある。拓影の1枚には「高祖大師御真筆卒塔婆文政五壬午八月十四日河内州葛城山高貴律寺於不動堂墨写之了無言道憲海」とある。また、書写年不明ながら、これを籠字によって透写したものが4枚遺っている。

- (12) 前掲注10書、目録番号18。
- (13) 前掲注10書、目録番号103。
- (14) 大阪府東大阪市東豊浦町にある髪切山慈光寺は役行者の開基になり、修験道の道場として栄えるが、空海が留錫の後伽藍を整え真言宗に改めた。中世以後兵火によって衰微したが、17世紀に亮海・安信らによって再興。額田の雙龍庵に隠棲中の慈雲飲光はしばしば当寺を訪れ、文化9年（1812）に饒慶が入寺して以後、正法律の寺として隆盛を見た。戦後は、真言毘盧遮那宗に改められた。鳳寛饒慶（1748-1829）は武蔵の人で郷里の昇覚寺に住したが、飲光を慕い進具し、慈光寺に入った。文政3年（1820）憲海も伝授をうけている。
- (15) 元興寺文化財研究所編『豊山長谷寺拾遺 第一輯 絵画』（1994年5月、総本山長谷寺文化財等保存調査委員会）目録番号91・92。
- (16) 小原前掲注6書。305頁に「刻兩部大曼荼羅附言」が翻刻される。
- (17) 前掲注10書、185頁。
- (18) 前掲注10書、目録番号113・114・132。校訂の内容については同書「長谷寺所蔵版木の概要 二 所蔵絵画と版木について」34-38頁に詳しい。
- (19) 前掲注2書、資料番号3045。同「饒慶像」は現在も慈光寺に所蔵されている。
- (20) 小原氏前掲注6書、314頁。
- (21) 注11参照。
- (22) 海如の字は光雲。長谷寺で敵英に師事し、河内高貴寺において慈雲飲光の弟子智幢法樹に進具した。文政12年（1829）に憲海より悉曇を学び、天保2～3年（1821-32）頃同じ憲海から報恩院流の伝授を受けている。長谷寺能満院の一世となり、高貴寺事務七世をつとめた。長楽寺の再建を行うほか、晩年は民衆教化に務めている。その伝記は田中海応「海如和上傳」（1924年12月、徳蔵寺）に詳しい。
- (23) 田中氏前掲注22書、48-49頁。
- (24) 小原氏前掲注6書、300～305頁。長谷寺版の「刻兩部大曼荼羅附言」に亀龍院版の焼失を惜しみ、山内にその復刻を考えていたことが記される。
- (25) 前掲注10書、185頁。
- (26) 前掲注10書、38頁。
- (27) 前掲注2書、資料番号1008～1017。田村宗立旧蔵仏画粉本の中には、長谷川家に関わる粉本が142点含まれる。11代等鶴（等廓）のほか、12代等叔、13代等舟の名が見える。
- (28) 前掲注2書、資料番号3002。同図を下絵とした版本は本稿版画目録19。
- (29) 前掲注2書、資料番号4112・4113。このほか4枚の「宝相七神図」白描粉本がある。
- (30) 前掲注2書、資料番号4099。
- (31) 『智山書庫所蔵目録』（第1巻：1994年3月・第2巻：1995年5月、真言宗智山派宗務庁）に収録される刊本で憲海の関与が確認できるのは『梵学要章』（2巻-326頁）のみである。
- (32) 小田慈舟「御室版兩部曼荼羅の開版と其功労者」（『密宗学報』178号、昭和3年6月）、294頁。
- (33) 法雲尊峰（1834-1889）の伝記については法雲の学友有馬鞭の著した『法雲阿闍梨行実』に詳しい。小原氏前掲6書、308～311頁に弟子の宮崎智全の註を加えたものが収録され、小田氏前掲注32書でも解説される。
- (34) 御室版兩部曼荼羅は、明治3年（1870）3月に開版して200部を摺り、大正2年（1913）5月に大村西崖が『三本兩部曼荼羅集』（仏書刊行会）を刊行した際に300部が摺られ、昭和47年（1972）5月佐和隆研による『御室版曼荼羅尊像集』（法蔵館）刊行にあわせて、さらに150部が摺られた。同曼荼羅については小田氏前



掲注32書のほか、ここに挙げた大村氏、佐和氏の著書がある。

- (35) 平安時代の僧兼意が描いた高雄曼荼羅の図像模本を後に転写した冊子。ほぼ完本をなし、高山寺に伝えられた後、個人蔵となった。醍醐寺所蔵本とともに、高雄曼荼羅の図像を伝える。柳沢孝「高雄曼荼羅の白描本」(「高雄曼荼羅の研究」所収。「美術研究所報告高雄曼荼羅」東京国立文化財研究所美術部編。1967年。吉川弘文館発行)に詳しい。
- (36) 注33参照。
- (37) 龍猛像(版画目録24)の刊記に「龍猛大士」裏書云「時承応三甲午霜月吉日當時／撥遣開眼者高野山宝性院主／翁賢宥取次施主之内法主信龍」龍猛菩薩／御筆八祖之内／和州三輪山衆徒中靈宝」于時嘉永四癸亥九月十日於大和國／三輪山平等寺中多樂院寫得訖／王城中眞六角堂頂法寺中能滿院大願／五十四歳」明治二年五月刻／志州沙門尊峯／洛陽僧大成拜寫／隨喜者／志州沙門無為道／勢州松阪沙門木如」伊勢國飯高郡丹生山神宮寺／五十五世無盡施贊募刻此一尊畢」とある。
- (38) 下絵となった粉本は前掲『仏教図像聚成－六角堂能滿院仏画粉本』収録の資料番号2261～2272。水天像(版画目録28)の刊記に「志州菅島信男木下佐助損貨七圓奉刻／此水天一尊伏願諸事成辦者／明治十年九月下浣／沙門尊峯募刻」とあり、地天像(版画目録25)の刊記に「地天上木糧寄附姓名勢州飯高郡大石村／不動院實忍／中尾慶次郎／中尾實之助／渡邊玄調／村崎勘兵衛／村崎甚之助／平井 兵衛／堀井幸右エ門／青木半右エ門／桑山莊兵衛／小林新右エ門／中川源七／伊藤仁右エ門／柴山新之助／隨喜者志州沙門尊峰志州沙門無為道／勢州松阪沙門等如摸寫主洛陽僧宗立」とある。同じ下絵によって明治4年にも大成らにより開版された十二天像があり、遺された「帝釈天像」(版画目録20)の刊記には「香山院闍影院瑞應院／施貨助刻此／帝釈天王而印行ス翼ハ／天下泰平也／高祖御請来十二天摸／本竝得備中淺口郡三／部山靈山寺什寶大師／御爪刻木版ヲ對校了／安政七年庚申三月廿／二日王城中心六角堂／頂法寺能滿院大願／六十三／其ノ為木版尤モ磨滅不少カラ／故ニ一校募刻／明治四年辛未春正月／京六角堂能滿院大成／敬識」隨喜者／志州／沙門尊峰」模寫主／洛陽／沙門宗立」とあって、浄土真宗大谷派の香山院龍温・闍影院空覚・瑞應院黙慧らの出資により上梓した版画で、大成の識語により旧能滿院工房の事業といえるが、彼らと尊峰の御室版直後の関わりが伺える資料であり、後の法雲による十二天像開版の基礎となった事業と思われる。
- (39) 「東寺の仏教版画」展図録(1991年3月。東寺宝物館)
- (40) 前掲注10書、目録番号1。
- (41) 京都市下京区室町通仏光寺下ルにあった山王神社の別当天台宗山王寺総持院は、明治維新後廢寺となり日吉神社のみが同地に残る。かつては天台座主によって山王祭が行われたことが『拾遺郡名所図会』『京都坊目誌』に書かれている。
- (42) 田村宗立旧蔵粉本において、大願は会津の絵師萩原盤山を先生と記しており、また、能滿院において大成は長谷川等鶴、鈴木百年を先生と記していて、絵画制作の専門家としての彼らを尊重している。

付記 福島県会津若松市自在院阿住義彦氏には、金剛寺文書および自在院文書について多くの御教示を賜りました。記して感謝の意を表します。

## 田村宗立旧蔵仏画粉本版画目録

目録番号	名称	材質技法	形態	員数	下絵作者	制作年	法量	備考
<b>A：憲海もしくは能満院による施印</b>								
001	種字星曼荼羅図	紙本木版	まくり	1枚	大願	江戸時代後期 (19th cen.)	59.4×32.9	能満院施印
002	釈迦親手華判梵書唵字	紙本木版	まくり	1枚	大願	安政3年 (1856)	58.9×33.1	能満院施印
003	六字名号	紙本木版	まくり	1枚	大願	安政6年 (1859)	109.2×40.1	能満院施印
004	光明真言字輪曼荼羅図	紙本木版	まくり	1枚	大願	安政5年 (1858) / 明治10年 (1877)	81.6×40.0	能満院施印 (志州木下復刻)
005	光明真言字輪曼荼羅図封紙	紙本木版	封紙	1枚	作者不詳	明治10年 (1877)	20.2×13.2	志州木下版
006	勝敵毘沙門天像	紙本木版著彩	まくり	1枚	作者不詳	文久2年 (1862)	113.5×59.5	能満院施印 (憲海下絵)
007	勝敵毘沙門天像封紙	紙本木版	封紙	1枚	作者不詳	文久2年 (1862)	27.5×33.0	能満院施印
008	請雨水鉢図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	54.5×51.5	
009	請雨水鉢図	紙本木版著彩	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	44.6×44.6	
010	稲荷明神像	紙本木版	まくり	1枚	大願	明治2年 (1869)	67.7×30.7	憲海施印 (羽州宗賢復刻)
011	稲荷明神像	紙本木版	まくり	1枚	大願	明治2年 (1869)	67.6×30.7	憲海施印 (羽州宗賢復刻)
012	稲荷明神像	紙本木版	まくり	1枚	大願	明治時代 (19th cen.)	66.2×30.1	
013	稲荷明神像	紙本木版	まくり	1枚	大願	明治時代 (19th cen.)	66.7×30.0	
014	宝相恵喜神・宝相寛童神像	紙本木版	まくり	1枚	宗立	江戸時代後期 (19th cen.)	27.3×19.7	能満院施印
015	宝相恵喜神・宝相寛童神像	紙本木版	まくり	1枚	宗立	文久元年 (1861)	27.5×19.7	能満院施印
016	宝相七神図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	69.9×33.8	能満院施印 (宗立下絵)
017	船玉明神像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	123.9×58.2	能満院施印 (大成下絵)
018	船玉明神像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	122.6×58.3	能満院施印 (大成下絵)
019	聖徳太子像	紙本木版	まくり	1枚	大成	嘉永6年 (1853)	35.2×24.6	頂法寺施印
020	帝釈天像	紙本木版	まくり	1枚	宗立	明治4年 (1871)	138.2×64.8	能満院大成施印 (浄土真宗 / 龍温・空覚・黙慧資)
<b>B：能満院工房解散後の版本-1 (尊峰とその関係者による施印)</b>								
021	金剛智像	紙本木版	まくり	1枚	大成	明治時代 (19th cen.)	181.5×130.1	志州尊峰施印
022	一行情	紙本木版	まくり	1枚	大成	明治時代 (19th cen.)	187.2×130.0	志州尊峰施印
023	善無畏像	紙本木版	まくり	1枚	大成	明治時代 (19th cen.)	182.7×128.4	志州尊峰施印
024	龍猛像	紙本木版	まくり	1枚	大成	明治2年 (1869)	208.2×129.5	志州尊峰施印
025	地天像	紙本木版	裏打	1枚	宗立	明治10年 (1877)	127.0×47.3	志州尊峰施印
026	毘沙門天像	紙本木版	裏打	1枚	宗立	明治10年 (1877)	126.5×47.2	志州尊峰施印

027	風天像	紙本木版	裏打	1枚	宗立	明治10年(1877)	126.5×27.2	志州尊峰施印
028	水天像	紙本木版	裏打	1枚	宗立	明治10年(1877)	126.7×47.0	志州尊峰施印
029	孔雀明王像	紙本木版	まくり	1枚	大成	嘉永元年(1848)	183.0×125.3	(原本智積院本長谷川賀一本による憲海模本)
030	不動明王像	紙本木版	まくり	1枚	大願	明治9年(1876)	193.4×118.2	志州大門・ほか施印
031	不動明王像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治時代(19th cen.)	54.8×40.3	(御室版-胎五大院)
032	不動明王像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治時代(19th cen.)	60.0×35.6	(御室版-胎五大院校合)
033	不動明王像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治時代(19th cen.)	60.1×35.6	(御室版-胎五大院校合)
034	仏眼仏母像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治時代(19th cen.)	54.5×39.5	(御室版-胎遍知院)
035	金剛界大日如来像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治時代(19th cen.)	55.5×36.7	志州岡村氏施印(御室版-金四印会)
036	金剛界大日如来像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治時代(19th cen.)	49.3×37.4	志州岡村氏施印(御室版-金四印会)
037	如意輪観音像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治時代(19th cen.)	57.7×33.8	志州佐七ほか施印(御室版-胎蓮華会)
038	大随求菩薩像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治4年(1871)	46.6×31.9	志州山田屋長七ほか施印(御室版-胎蓮華会)
039	大随求菩薩像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治4年(1871)	42.6×30.0	志州山田屋長七ほか施印(御室版-胎蓮華会)
040	大随求菩薩像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治4年(1871)	43.6×29.5	志州山田屋長七ほか施印(御室版-胎蓮華会)
041	馬頭観音像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治時代(19th cen.)	38.0×33.6	志州大門施印(御室版-胎蓮華会)
042	馬頭観音像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治時代(19th cen.)	55.9×32.1	志州大門施印(御室版-胎蓮華会)
043	金剛界曼荼羅三昧耶会図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治時代(19th cen.)	40.1×28.4	

C：能満院工房解散後の版画-2(晩年の大成下絵)

044	出羽三山像	紙本木版	まくり	1枚	大成	明治時代(19th cen.)	37.4×43.8	羽州羽黒山本道寺施印
045	興教大師鐙像	紙本木版	まくり	1枚	大成	明治21年(1888)	79.6×63.7	榊原了月・齋藤隆現施印
046	興教大師鐙像封紙	紙本木版	封紙	1枚	作者不詳	明治21年(1888)	24.1×15.8	榊原了月・齋藤隆現施印
047	弘法大師空海像	紙本木版	まくり	1枚	大成	明治時代(19th cen.)	25.0×17.4	平田職兄施印
048	弘法大師空海像	紙本木版	まくり	1枚	大成	明治時代(19th cen.)	25.0×17.4	平田職兄施印
049	弘法大師空海像	紙本木版	まくり	1枚	大成	明治時代(19th cen.)	30.0×16.5	平田職兄施印
050	弘法大師空海像	紙本木版	まくり	1枚	大成	明治時代(19th cen.)	95.0×46.0	平田職兄施印
051	弘法大師空海像	紙本木版	まくり	1枚	大成	明治時代(19th cen.)	97.7×45.0	平田職兄施印

D：海如施印版画

052	金剛界種子曼荼羅図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期(19th cen.)	59.3×52.9	海如施印
053	胎藏界種子曼荼羅図	紙本木版著彩	まくり	1枚	森田重治郎	弘化2年(1845)	59.2×52.9	海如施印
054	両界種子曼荼羅図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期(19th cen.)	65.6×28.7	海如施印
055	法華曼荼羅図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	天保13年(1842)	61.6×48.4	海如施印
056	法華曼荼羅図袋	紙本木版	袋	1枚	作者不詳	天保13年(1842)	24.7×15.6	海如施印
057	不動明王像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期(19th cen.)	65.5×30.2	海如施印(海如印)
058	弘法大師空海像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期(19th cen.)	65.5×30.1	海如施印(海如印)



059	理源大師聖宝像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	65.2×29.6	海如施印 (海如印)
-----	---------	------	-----	----	------	--------------------	-----------	------------

#### E：龍肝施印版画

060	胎藏界種字曼荼羅図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	48.4×36.3	龍肝施印
061	金剛界種字曼荼羅図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	48.5×36.4	龍肝施印
062	両界曼荼羅解説	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	18.4×12.8	龍肝施印

#### F：長谷寺関係版画

063	胎藏界曼荼羅図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	文政12年 (1829)	77.0×136.0	和州長谷寺施印 (長谷寺版)
064	十一面観音像 (長谷寺式)	紙本木版貼紙補正	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	97.1×37.2	和州長谷寺施印
065	十一面観音像 (長谷寺式)	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	91.0×37.3	和州長谷寺施印
066	釈迦如来文殊弥勒像 (授戒本尊)	紙本木版	まくり	1枚	森田易信	江戸時代後期 (19th cen.)	129.0×59.6	和州長谷寺能満院施印
067	加行本尊并両大師像袋	紙本木版	袋	1枚	森田易信	江戸時代後期 (19th cen.)	29.5×12.7	和州長谷寺能満院施印

#### G：有憲海所蔵印版画

068	当麻曼荼羅図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	57.6×46.2	和州当麻寺施印 (憲海印)
069	真言八祖図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	49.1×25.5	讃州印山施印 (能満院印) (無言蔵印)
070	天神像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	文政元年 (1818)	96.0×29.2	菅原長親氏施印 (無言蔵印)
071	辨才天像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	94.4×39.7	奥州金華山施印 (無言蔵印)
072	地藏菩薩像	紙本木版	裏打	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	105.5×29.1	河州現光寺施印 (無言蔵印)
073	釈迦親手華判梵書唵字	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明和7年 (1770)	66.0×27.9	豊後臼杵□福寺施印 (無言蔵印)
074	理趣経曼荼羅図	紙本木版	折本	1冊	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	32.0×15.2	和州高野山補陀洛院施印 (無言蔵印)
075	承陽大師希玄道元像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	46.0×17.0	(無言蔵印) (能満院印)
076	宝珠曼荼羅図	紙本木版著彩	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	59.3×33.3	(無言蔵印)
077	随求曼荼羅図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	36.0×37.5	(無言蔵印)
078	法然 (円光大師源空) 像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	12.0×26.0	(無言蔵印)
079	宝篋印塔図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	90.1×38.9	(無言蔵印)

#### H：有能満院所蔵印版画

080	某僧像 (持扨子)	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	39.6×14.6	智照施印 (能満院印)
081	某僧像 (定印)	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	39.6×14.6	播州大洞施印 (能満院印)
082	当麻曼荼羅図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	文久3年 (1863)	59.5×44.2	和州当麻寺施印 (能満院印)
083	当麻曼荼羅図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	文久3年 (1863)	69.2×44.3	和州当麻寺施印 (能満院印)
084	如来荒神像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	94.0×41.1	(能満院印)
085	承陽大師希玄道元像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	103.0×32.5	(能満院印)
086	釈迦達磨道元像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	40.2×28.0	(能満院印)

087	承陽大師希玄道元像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	109.1×41.0	(能満院印)
088	某僧像 (持如意・半身)	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	42.5×21.0	(能満院印)
089	某僧像 (持如意・半身)	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	28.3×14.3	(能満院印)

#### I: その他有端書版画

090	阿弥陀経变相図	紙本木版	裏打	1枚	森田易信	嘉永元年 (1848)	134.5×61.7	蝦夷善光寺施印
091	五趣生死輪図	紙本木版	まくり	1枚	姉崎織江	嘉永3年 (1850)	134.2×61.3	姉崎織江版
092	太上秘法鎖宅靈符	紙本木版	裏打	1枚	作者不詳	寛政12年 (1800)	113.0×30.0	石籠子施印
093	金剛界種字曼荼羅図	紙本木版	まくり	1枚	原在中	江戸時代後期 (19th cen.)	47.1×46.0	京都阿弥陀寺施印
094	胎藏界種字曼荼羅図	紙本木版	まくり	1枚	原在中	江戸時代後期 (19th cen.)	48.0×46.0	京都阿弥陀寺施印
095	牛頭天王歳徳八将神像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	65.5×30.3	井筒屋藤兵版
096	牛頭天王像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	60.0×33.4	井筒屋藤兵版
097	大黒天像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	87.2×31.7	会津恵日寺施印
098	愛宕権現像	紙本木版	裏打	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	98.9×41.8	京都愛宕山施印
099	千手観音像	紙本木版	裏打	1枚	作者不詳	嘉永元年 (1848)	67.8×30.6	京都清水寺施印
100	如来荒神像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	82.5×29.6	摂州清澄寺施印
101	天神像	紙本木版	裏打	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	92.8×43.4	和州与喜天神施印
102	釈迦弥勒十六羅漢像	紙本木版	裏打	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	73.0×34.0	(端書きあり)
103	青面金剛像	紙本木版	裏打	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	65.4×30.3	(端書きあり)
104	太上秘法鎖宅靈符	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	103.5×61.8	(下総千葉妙見寺より貰う)
105	真言密宗安心曼荼羅図 (念珠図)	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	35.7×26.4	(端書きあり)

#### J: 無刊記絵師系下絵版画

106	地藏菩薩像	紙本木版	裏打	1枚	円山応挙	江戸時代後期 (19th cen.)	60.5×27.5	
107	釈迦十六羅漢図	紙本木版	まくり	1枚	山口城照	江戸時代後期 (19th cen.)	32.0×19.7	
108	地藏菩薩像	紙本木版	まくり	1枚	杜多文雄	江戸時代後期 (19th cen.)	36.0×23.8	
109	十三仏図	紙本木版	まくり	1枚	長谷川等鶴	嘉永2年 (1849)	102.7×41.6	
110	地藏菩薩像	紙本木版	まくり	1枚	冷泉為恭	嘉永7年 (1854)	112.3×40.8	

#### K: 僧侶施印版画

111	烏椀洪摩明王像	紙本木版	まくり	1枚	原在中	江戸時代後期 (19th cen.)	68.9×36.7	志州円隆施印
112	阿弥陀来迎図	紙本木版	まくり	1枚	中西誠應	江戸時代後期 (19th cen.)	66.9×31.1	清涼室施印
113	弘法大師十大弟子像并然慧像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	天明3年 (1783)	103.7×44.6	月心人施印
114	弘法大師十大弟子像并然慧像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	天明3年 (1783)	103.7×44.6	月心人施印
115	弘法大師空海像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治時代 (19th cen.)	32.2×16.1	志州円隆施印
116	弘法大師空海像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治時代 (19th cen.)	32.2×16.1	志州円隆施印

117	弘法大師空海像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治時代 (19th cen.)	32.3×16.1	志州円隆施印
118	弘法大師空海像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治時代 (19th cen.)	32.3×16.1	志州円隆施印
119	弘法大師空海像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治時代 (19th cen.)	32.3×16.1	志州円隆施印
120	弘法大師空海像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治時代 (19th cen.)	32.3×16.1	志州円隆施印
121	興教大師覺鑊像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治11年 (1878)	112.0×44.2	志州円隆施印
122	興教大師覺鑊像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治11年 (1878)	118.0×46.6	志州円隆施印
123	光明真言字輪曼荼羅図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	96.2×46.0	慈光施印
124	毘沙門天像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	弘化3年 (1846)	86.5×30.6	勢州田山施印
125	慈恵大師良源像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	弘化3年 (1846)	61.2×47.2	勢州田山施印
126	法然 (円光大師源空) 像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	万延2年 (1861)	112.0×52.0	定円施印
127	法然像封紙	紙本木版一部墨書	封紙	1枚	作者不詳	万延2年 (1861)	31.8×42.4	定円施印
128	童子経曼荼羅図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	46.2×21.3	武州成身院元映施印
129	信晧曇藏像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	嘉永7年 (1854)	58.0×31.5	施印・寿像

#### L: 京都社寺施印版画

130	地藏菩薩像	紙本木版	裏打	1枚	作者不詳	明治時代 (19th cen.)	26.2×9.0	京都花園要地藏施印
131	聖徳太子像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	32.5×13.6	京都広隆寺施印
132	広隆寺刷物	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	31.3×5.2	京都広隆寺施印
133	聖徳太子像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	32.5×13.6	京都広隆寺施印
134	聖徳太子像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	32.5×13.6	京都広隆寺施印
135	聖徳太子像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	32.5×13.6	京都広隆寺施印
136	聖徳太子像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	32.5×13.6	京都広隆寺施印
137	青面金剛像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	24.7×11.3	京都室町仏光寺庚申堂施印
138	地藏菩薩像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	15.5×8.0	京都新徳寺・万年寺施印
139	地藏菩薩像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	27.7×15.3	京都壬生寺施印
140	地藏菩薩像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	18.8×10.2	京都壬生寺施印
141	准胝観音像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	15.7×8.1	京都新徳寺施印
142	千手観音二天王像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	24.0×15.9	京都清水寺施印
143	千手観音二天王像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	24.0×15.9	京都清水寺施印
144	大随求菩薩像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	19.9×15.6	京都清水寺慈心院施印
145	五大虚空蔵菩薩像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	39.0×28.0	京都東寺観智院施印
146	釈迦涅槃図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	46.6×31.0	京都東福寺施印
147	釈迦涅槃図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	46.6×31.0	京都東福寺施印
148	毘沙門天吉祥天善膩師像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	27.3×9.4	京都東福寺北谷毘沙門堂施印
149	薬師三尊十二神将像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	27.6×20.1	京都平愈寺施印



## M：諸国社寺施印版画

150	法然（円光大師源空）像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	36.5×15.3	奥州往生寺施印
151	大黒天像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	25.8×17.2	会津恵日寺施印
152	馬頭観音像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	29.5×16.4	会津木流観音寺施印
153	妙海禪尼像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	66.2×29.6	紀州大日寺施印
154	三井寺梵鐘図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	33.8×34.9	江州三井寺施印
155	阿弥陀二十五菩薩来迎図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	66.6×31.6	江州西教寺施印
156	訶利帝母像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	27.1×11.5	志州庫蔵寺施印
157	十一面観音像	紙本木版著彩	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	31.3×15.2	志州正福寺施印
158	十一面観音像	紙本木版著彩	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	31.3×15.2	志州正福寺施印
159	十一面観音像	紙本木版著彩	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	31.3×15.2	志州正福寺施印
160	十一面観音像	紙本木版著彩	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	31.3×15.2	志州正福寺施印
161	十一面観音像	紙本木版著彩	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	31.3×15.2	志州正福寺施印
162	十一面観音像	紙本木版著彩	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	31.3×15.2	志州正福寺施印
163	十一面観音像	紙本木版著彩	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	31.3×15.2	志州正福寺施印
164	十一面観音像	紙本木版著彩	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	31.3×15.2	志州正福寺施印
165	十一面観音像	紙本木版著彩	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	31.3×15.2	志州正福寺施印
166	十一面観音像	紙本木版著彩	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	31.3×15.2	志州正福寺施印
167	十一面観音像	紙本木版著彩	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	31.3×15.2	志州正福寺施印
168	十一面観音像	紙本木版著彩	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	31.3×15.2	志州正福寺施印
169	十一面観音像	紙本木版著彩	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	31.3×15.2	志州正福寺施印
170	十一面観音像	紙本木版著彩	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	31.3×15.2	志州正福寺施印
171	十一面観音像	紙本木版著彩	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	31.3×15.2	志州正福寺施印
172	兩躰十一面観音像	紙本木版	綴	1幅（3刷）	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	26.7×35.7	勢州田宮寺施印
173	子安観音像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	75.3×61.1	勢州観音寺施印
174	聖徳太子像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	38.1×29.9	摂州四天王寺施印
175	弘法大師空海像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	38.0×17.0	摂州大日寺施印
176	聖観音像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	27.0×17.1	武州下吉見岩殿山）
177	不空鞞索観音像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	17.5×8.0	和州興福寺南門堂施印
178	三面大黒天像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	56.5×21.5	和州高野山金剛峯寺施印
179	弘法大師空海像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	60.0×20.6	和州高野山金剛峯寺灯籠堂施印
180	馬鳴菩薩像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	53.2×67.5	和州高野山清淨心院施印
181	天神像	紙本木版	裏打	1枚	堀川興教	江戸時代後期（19th cen.）	56.6×33.4	玉田施印
182	天神像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	弘化2年（1845）	34.0×14.5	示水施印
183	天神像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	弘化2年（1845）	33.7×14.3	示水施印
184	地藏菩薩像	紙本木版	裏打	1枚	作者不詳	江戸時代後期（19th cen.）	27.7×11.6	駿州如水施印





219	善導法然像封紙	紙本木版	封紙	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	24.8×36.5	185-218は一括
220	胎藏界種子曼荼羅図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	44.3×41.6	
221	金剛界種子曼荼羅図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	44.4×41.8	
222	理趣経曼荼羅図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	67.2×55.5	
223	両界種子曼荼羅図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	55.5×33.5	
224	宝珠曼荼羅図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	65.2×38.6	
225	阿弥陀三尊像 (善光寺式)	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	41.1×30.4	
226	金剛界大日如来像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治時代 (19th cen.)	26.3×12.7	
227	金剛界大日如来像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治時代 (19th cen.)	26.3×12.7	
228	普賢延命菩薩像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	68.2×30.0	
229	普賢延命菩薩像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	45.2×20.2	
230	准胝観音像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	33.5×20.2	
231	地藏菩薩像	紙本木版	裏打	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	65.8×31.3	
232	地藏菩薩六道図	紙本木版	裏打	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	67.5×31.0	
233	十三仏図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	63.5×30.6	
234	十三仏図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	66.7×29.2	
235	不動明王像 (黄不動)	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	97.3×42.3	
236	不動明王像 (黄不動)	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	97.6×42.6	
237	不動明王二童子像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	27.0×14.8	
238	辨才天像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	36.2×16.3	
239	十二天図 (右)	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	107.0×40.3	238-239は一括
240	十二天図 (左)	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	107.0×40.3	238-239は一括
241	日天像	紙本木版	裏打	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	132.5×58.5	
242	青面金剛像	紙本木版一部著彩	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	67.5×30.8	
243	青面金剛像	紙本木版	裏打	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	96.3×43.5	
244	烏枢洪摩明王像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	55.3×39.3	
245	秋葉権現像	紙本木版	裏打	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	30.2×13.0	
246	蓬萊神仙図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	27.5×76.3	
247	蓬萊神仙図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	64.0×27.1	
248	歳徳八将神像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	59.7×29.7	
249	稻荷明神像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	24.4×13.8	
250	天神像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	112.0×30.0	
251	渡唐天神像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	63.9×17.5	
252	出世大黒天像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	12.8×9.2	
253	出世大黒天像封紙	紙本木版	封紙	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	22.3×28.9	
254	聖徳太子像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	36.5×15.1	



255	聖徳太子像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	36.5×33.8	
256	聖徳太子像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	48.8×36.4	
257	役行者像	紙本木版著彩	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	53.7×26.7	
258	弘法大師空海像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	66.2×46.0	
259	弘法大師空海像	紙本木版著彩	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	24.5×16.0	
260	弘法大師行状曼荼羅図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	64.7×43.8	
261	法光大師真雅像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	文政11年 (1828)	59.2×28.2	
262	興教大師覚鑿像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治時代 (19th cen.)	42.9×37.6	
263	興教大師覚鑿像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治時代 (19th cen.)	44.6×37.6	
264	興教大師覚鑿像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治時代 (19th cen.)	66.1×63.4	
265	興教大師覚鑿像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治時代 (19th cen.)	79.8×62.9	
266	興教大師覚鑿像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	明治時代 (19th cen.)	86.0×46.4	
267	法然 (円光大師源空) 像	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	30.2×14.5	
268	西国三十三所霊場	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	37.9×19.8	
269	宝篋印塔図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	40.5×28.0	

#### O：高僧伝記版本

270	高野山清浄心院廿日大師略縁起	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	24.9×34.3	和州高野山清浄院施印
271	法然上人絵伝	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	53.2×30.0	
272	法然上人絵伝	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	53.2×30.0	
273	法然上人絵伝	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	53.2×30.0	
274	法然上人絵伝	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	53.2×30.0	

#### P：境内図版本

275	巖島社頭図	紙本木版	まくり	1枚	作者不詳	江戸時代後期 (19th cen.)	29.8×44.0	宮島西岩國屋廻廊店重兵衛板
276	長谷寺図	紙本木版	まくり	1枚	中和	江戸時代後期 (19th cen.)	35.3×48.6	平安法橋中和画